

# 小学生の部





栃木県那須塩原市立埼玉小学校

四年 前野<sup>まえの</sup> ちえり

班長の言葉

「危ないから、一列で歩いて。」

これは、今年度、登校班の班長になった兄の言葉です。私は毎日、片道二キロ以上の道のりを歩いて登校しています。今まで優しくかった兄が急に、並んで歩く事に対して、注意をするようになりました。私は、そのような兄をいつしか嫌だと感じるようになりました。

ある雨の日、かさをさしながら、いつものように友達と並んで歩いていました。兄の

「危ない。」

という言葉ではとしましたが、自転車にのった中学生とぶつかってしまいました。転んで、かさが曲がり、膝

から血が出ていました。

「助けられなくてごめんね。」

いつも怒ってばかりの兄が悲しい顔で言いました。その日の夜、兄と母が、私がかがをした事について話をしていました。兄は、

「注意をしても聞いてくれない。僕のせいだけではないけど、僕の力不足なのかもしれない。注意する事でみんなに嫌われて悲しいし、本当は班長なんかやりたくない。」

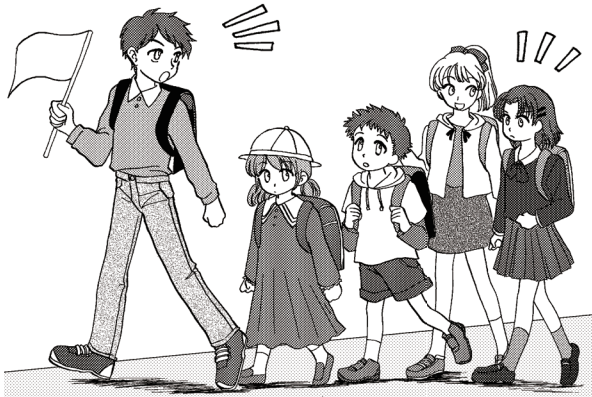
と言つて泣いていました。兄がそんな風に言うなんて思いませんでした。その後、私も母と話をしました。まず、今回の事故の原因について考えました。私は、せまい道を二列で歩いていた事、友達との話に夢中になり、前をよく見ていなかった事がいけなかったと思います。そして母は、事故と安全は常に紙一重で、自動車との事故は、運転者側だけでなく、歩行者側の問題もあると言います。その意味について少し考えてみました。確かに、事故の要因は一つではありません。今回の事故も私の不注意に加えて、雨でかさをさしていたため、周りが見えにくくなっていた事、中学生側の不注意もあった

かもしれません。このように、少くくらい大丈夫だろうという思いから、その時の様々な状況が重なり、事故になるのだと思いました。

では、私にできる事は何なのか、自分なりに考えてみました。それは、自分自身の毎日の行動だと思っています。その中で、兄が私に嫌われても、私を守ろうとしていた思いに気づき、涙ができました。そして、目の前の楽しい事しか考えていなかった自分を恥ずかしく思いました。私は、みなに堂々と注意ができる兄の事をとてもほろしく思いました。次の日から私は、兄の命令にしたがいました。私が一列で歩くと、周りの友達も一列で歩くようになりました。

私は今回の事故から、自分自身が守らなければならない交通ルールについて、身をもって学びました。兄と登校できるのは後半です。これからは私が、低学年の子を安全に登校させる立場になります。兄の思いを私も引き継ぎ、みなに安全に登校できるように、まずは私自身が、登校中は、必ず一列になり、周りをしっかりと確認しながら歩く事から始めていこうと思います。そして私も、兄のように、相手を思い、注意ができる勇気ある人にな

りたいと思います。



優秀作

国務大臣・国家公安委員会委員長賞

## 東京都東京学芸大学附属小金井小学校

### こうつう少年団とわたし

一年 中村 心美  
なかむら ここみ

「これ、入ってみない？」と、お母さんが市のこうほうを見せてくれました。「こうつう少年団ってなに？」とわたしがきくと「いろいろなかつどうをおして、こうつうルールやこうつうマナーをみにつけるところよ。心美は4月から小学生でしょう？車のじこにあわないように、しっかりおべんきようしてきてね。」とお母さんがいったので、ホームページも見せてもらったら、せいふくがかつこよかったので入ることにきめました。けいさつしよで入団しきました。団長さんが「がんばってね。」と言って、ベレーぼうをかぶせてくれたので、とてもうれしかったです。

こうつう少年団では、いろいろなことをおしえてくれます。おうだんほ道をわたるとき、手をたかくあげるのはなぜかというと、子どもはせがひくくて、車のうんてん手さんから見えにくいので、気づいてもらうためだとして、びつくりしました。どうして手をあげるのか、りゆうまでかんがえたことがなかったからです。だから、わたしはおうだんほ道をわたるときは、ちゃんとうんてん手さんに気づいてもらえるように、おもいつきり手をピンツとあげて、かつこよくわたります。うんてん手さんがにつこりわらうと、わたしもしあわせな気持ちになつて、につこりわらいます。

こうつう少年団のかつどうは、べんきようだけではありません。みんなでいちごがりに行つたり、こてきたいのれんしゅうをしたり、白バイにのせてもらつたり、楽しいことがいっぱいです。おまわりさんはとてもやさしいです。でも、けいさつ学校へ見学に行つたとき、あせをいっぱいかきながらきびしくんれんをしていたので、すぐかつこいいとおもいました。小学校からのかえり道、お友だちとおしゃべりしたり、走りだしたくなつてしまふけれど、しんけんにくんれんしていたおまわり

さんをおもいだして「いけない、わたしはこうつう少年団だった。」とおもってがまんします。

こうつう少年団に入って、わたしはこうつうルールをよくまもるようになりました。わたしだけではありませぬ。お父さんも「心美ががんばっているのだから、しっかりしなくちゃな。」といって、自てん車よのヘルメットをかかってきました。「ヘルメットのひもは、あごの下でカチツというまではめるんだよ。」と、おしえてあげたら、カチツと音をならしてうれしそうなかおをしたので、二人で大わらいました。

わたしはこうつう少年団が大すきです。もつとこうつうルールにくわしくなって、みんなのお手本になりたいです。そして、力をあわせて、じこのないまちをつくりたいです。

## 自てん車

夕ごはんをたべ終わったとき、

「ちよつとみんな聞いて。」

とおかあさんから言われました。そして、うでと太ももにできた大きなあざを見せてくれました。おかあさんは、自てん車でしごとに行っています。その日のかえりみち、小学生高学年くらいの男の子と自てん車でぶつかってころんでしまったとの話でした。見通しのわるいまがりかどで、とまってかくにんしていたらおかあさんの自てん車に、左がわからすごいきおいで自てん車がががつてきたそうです。あぶないっと思つたときには、よけきれずぶつかってしまったとのことでした。その男の子もころんでしまいました。二人とも大きなけがはしなかつたけれど、とてもいたかつたそうです。男の子もきつとけがしていると思いました。

おかあさんは、けがのことよりも、わたしたちの自て

ん車のり方についてすぐしんばいになったことを話してくれました。その男の子は、先に行ってしまった友だちにおいつきたくて、スピードを出していて、まがりかどでもかくにんせずにまがってしまったのです。そういうことは、きつとわたしたちにもおこりそうだからとしんばいになったそうです。

「もしもそこにいたのがお年よりだったら、もしかしたらころんで大けがをしてみましたかもしれない。」

とおかあさんは言いました。いのちにかかわる大へんなじこになっていたかもしれない。自分たちが、自分がかぞくがじこのかがいしやになってしまいかもしれないと、とてもこわくなりました。

自分も、みんなもけがをしないように、しんばいをかけないように、こう通ルールはしっかりとまもらないといけないとよくわかりました。

自てん車にのるときには、なにかあってもあわてずに、まわりをかくにんしないといけないと思いました。まだ、一人で自てん車にのって出かけることはしたことがないけれど、まがりかどやこうさ点では、一回とまってかくにんするようにしています。自分はいじょうぶではな

く、自分もじこをおこしてしまうかもしれないところにとどめて行どうしていきます。

## 愛知県碧南市立西端小学校

三年 やまだ 山田 いろは 彩晴

### 交通安全とわたしのちかい

わたしが三年生になってうれしかったのは、大すきな自転車に自分一人で乗ってもよくなったことだ。

「これで一人でもそろばん教室に行けるよ。」

うきうきしながらお父さんに話すと、お父さんはゆっくりと話し始めた。

「よく通る大きな道路のすみに、お花やおかしがおそなえしてあるのを知ってるかい。」

道路に物が置いてあるなんてふしぎだなと、ずっと前から気になっていた場所だ。お父さんの話を聞いて、そこは交通事故で子どもが死んでしまった場所だということを知った。

「彩晴は、死角って知ってるか。死角はとてもおそろしいんだぞ。」

お父さんはしんけんな顔で話を続けた。

「車の運転手からは、見えにくい角度がある。それが死角だ。自転車が入ってしまうと、運転手から気づかれずに、ひかれてしまうことがあるんだ。」

わたしは、事こで死んでしまった子のことを考えた。もつとたくさん遊んだり、勉強したりしたかっただろうな。そう思うと、知らない子のことだけど、とても悲しくなった。

わたしは、今までに交通事このしゅん間を見たことはない。でも、そのこわさは分かる。学校の交通安全教室で、人形が車にひかれてしまうところや、トラックにまきこまれた自転車ぐちゃぐちゃになる実えんを見たからだ。自転車には乗りたいけど、こわいなという気持ちが大きくなってしまった。もつと交通安全の勉強をすれば安心できるかもしれない。お母さんにそう言うと、近くのちゅうざい所におまわりさんがいることを教えてくれた。わたしは、話を聞きに行くことにした。

ちゅうざい所に行くのははじめてで、どきどきした。

でも、おまわりさんはやさしそうな人で、いろいろな話をしてくれた。

「今日も近くの町で交通事こがありました。」

ついとつ事こだそうだ。本当に、近くでも事こが起きているんだなとびつくりした。自転車に乗るときに大切なのは、ヘルメットをかぶることや、止まれのひょうしきの所でかならず止まることだという話も聞いた。それから、おまわりさんは、事こや事けんが起きた時だけじゃなくて、悲しい事こが起きないように、みんなに注意をよびかける活動も大切に行っているということも教えてくれた。

お父さんから聞いた交通事このあつた場所には、いつ通つてもおそなえがある。家族や友だちは、いつまでたつてもつらいんだな。わたしは、そこを通るたびに「命の大切さ」を考えるようになった。おまわりさんの話を聞いて、わたしたちの大切な命を守るために働いている人がいることも知ることができた。

自転車のハンドルは「命がけのハンドル」だ。大すきな自転車に乗るときには、交通ルールをしっかり守つて乗りたいと思つた。



## 熊本県玉名市立玉名町小学校

四年 村上 むらかみ まどか

### 自分の身は自分で守る

私のお母さんは少し心配しようかもしれない。だって私のお母さんは私が小学2年生の初めごろまでの間、毎朝ずっと私と妹と一しょに歩いて学校へ行っていたからだ。私の家は学校から少しはなれていて歩いて20分位かかる。ようち園のころは車で送りむかえをしてもらっていて子どもだけでこんなに長いきりを歩いた事がなかったから道をまちがえたらどうしようとか、車とぶつかったらどうしようとかそんな不安があったからお母さんが一しょに学校へ行ってくれるのが心強かったし、うれしかった。でも、小学校の学校生活にも少しずつなれてきた1年生の終りごろ他の子達は自分だけで学校へ行っているのに私はお母さんと一緒なのがちょびりはずかしくなってきた、ある日私は

「もうついてこなくて大丈夫だよ。」

とお母さんに言ってみた。するとお母さんは

「もう少し一しょに行ってもいいでしょ。ダメなの。」と聞いてきたので

「ダメじゃないけど。」

としか言えなかった。

それからもしばらく心配しようなお母さんと学校へ行く事になった。一しょに歩いて学校へ行っている時は、「信号を待つ時は前に出すぎない」「角を曲がる時は向こうから何も来ないかを立ち止まって大回りしないように曲がる」「見通しの悪い道をわたる時は手前で必ず止まって左右をかくにんしてわたる」「数m先の歩行者信号が青点めつしていてもあわてて走って横だん歩道をわたろうとしない」中でも特におどりの練習のように何度も言われたのが私達よりはるかに高いへいの横を通りその先にある道をわたる時は横だん旗を持った手をめいいつばいまっすぐ高く上げてへいの上から旗が見えるように道をわたるといふものだ。これは反対がわからきた車にこちらから歩行者が歩いてくる事を気づいてもらうために考えたお母さんのアイデアだ。「もつと手を手を高く上げて」とくり返し言われたものだ。お母さんから何度も注意されていやだなあと思った事もあったけど毎日く

り返す事で次第にこの道ではこう注意するというのが頭で考えなくても自然に体が動くようになっていきお母さんにも注意される事が少なくなっていた。そんなもうすぐ夏休みというころとつぜん

「もう大丈夫だよね。」

とお母さんが言ったのでちよつとびつくりした。私はあらためてお母さんがどうしてそんなに心配するのかわかっていた。聞いてみた。

「よく事このニュースがあるでしょ。あなた達が事こにあったらと思うとじつとしていられなかったの。」とお母さんが言った。

たしかにテレビのニュースでは毎日のように事このニュースを見る。時には私と同じ年位の子が事こで亡くなったニュースを見たりするととてもこわくなる。朝、「いつてきます」と出かけたきり事こにあつてお母さんに会えなくなるなんてぜつ対にいやだ。お母さんも同じような事を言っていた。だからとても心配なんだと。

「家から一歩出たら自分の身は自分で守るしかない」

お母さんの口グセだ。お母さんは守ってあげたくても守ってあげられないのだと。

お母さんはいつも一しよにいられないから自分で身を守る方法を私達に身につけさせてくれたのだ。お母さんはずかしいなんて思つてごめんさい。

私は今小学4年生になっているけど今もお母さんに言われた事を思い浮かべ、自分の身は自分で守つて元気に学校に通っている。

毎日「ただいま」とげんかんから大きな声で言つて心配しようなお母さんを安心させている。

## 香川県観音寺市立観音寺小学校

五年

福山ふくやま

陽樹はるき

## 家族をもう悲しませない

ぼくは一年生のときに交通事故にあつた。道路をはさんだ向こう側の道にいたお姉ちゃんが「こつちにおいで。」とよんでいた。ぼくもお姉ちゃんの方に早く行きたくて、とつさに横だん歩道が無い道で手をあげて、それに気づいた手前の車が止まってくれた。だから安心して

て、ぼくは走ってわたった。でも向こう側の車は止まらずぼくに向かってきた。どこかのおじさんが大声で「あぶない！」とさげんでいた。ぼくはとっさによけようとしたけれど、体がこぼぼって動けなかった。ぼくは車にはねられて転がった。お姉ちゃんは先に歩いていたらけれど、しようとした音で何事かとふり返り、車の下で転がっているぼくを見て、事故に気付いたらしい。ぼくはこわくてあまりはつきりと覚えていないけれど、気づいたら周りに大人がいつぱいいて、お姉ちゃんが泣いていた。ランドセルがぼくを守ってくれた。警察からの知らせを聞いてかけ付けたお母さんも泣きそうだった。何が何だかわからなかった。ただただこわかった。

本当は両側の車が止まってくれているのを確認しないといけなかったのに、本当は横だん歩道のある位置まで歩いて行ってわたればよかったのに。

この事故から、家族で絶対に守らないといけない決まりごとができた。道をわたりたいときは、必ず「横だん歩道」でわたること、横だん歩道をわたるときも右と左をちゃんと確認してわたること。

当たり前前でだれでも知っている。保育園の時から

ら先生や家族に何度も何度も言われてきたことだけど、そうしないといけないとは思っていても、やりたいことで頭がいっぱいになるとできなくなる。でももう家族を悲しませたくない。

ぼくは今五年生になって一人で自転車に乗って友達の家遊びに行く。習い事にも図書館にも自転車で行く。でも自転車は車といっしょ。だからぼくが交通ルールを守らないと加害者になって人をきずつけることもある。

事故は、加害者もひ害者もその周りの家族も悲しませる。あのとき、ぼくにしようとした運転手さんも本当につらそうだった。連らくを受けた学校の先生たちもびつくりしたがぼくが無事なことに安心し、軽はずみな行動を注意した。ぼくは改めて、ぼくのしてしまった行動がこんなに色んな人にめいわくをかけていることに気づき、つらくなった。

どんなに急いでいても、急な飛び出し、点めつ信号中の横だんは絶対にやめようと心にちかった。

大切な妹

私のたった一人の妹は、来年四月にピカピカの小学校一年生だ。しつかり者の妹だけど道路を一人で歩いている姿を想像すると、何だかちよつとドキドキする。いつも必ず両親か私と手をつないで歩いているからだ。その妹が来年四月から一人で登校するのかと思うとやっぱり不安。

そこで、家族で話し合い、散歩がてらに通学路を含めた我が家の交通安全教室を開く事にした。時間は夜。夕ご飯の後、運動もかねて妹の為だけの交通安全教室開催。保育所でも交通安全教室があったらしく、自信満々の妹。でも、実際は危なっかしい所だらけ…。両親が言うには、私が入学前にも同じ事をして、心配でたまらなかつたそうだ。今の私はまるで、両親のような気持ちで妹を見守って心配でたまらない。

保育所や学校で開かれる安全教室と、実際の道路では危険度がまるで違う。

危険な場所は横断歩道だけではない。私が思う通学路での危険な場所、第三位は交通量が多い場所ばかりだということ。第二位は自転車や原付バイクも歩行者と同じ場所を通るので前だけでなく、後ろも注意が必要。第一位は、商店が多いので道路だけでなく、駐車場に出入りする為に急に曲がってくる車が非常に多いという所。

一つ一つ、確認して妹に教えているのだけど、夜と昼間の交通量が全く違うので慣れてきたら昼間にも教室を開催したり、もつと慣れてきたら私と二人きりで練習したり、色んなやり方でしつかりと教えていきたい。

ニュースで時々耳にする、悲しい事故…。そんなニュースが一つでも少なくなるように私たちが出来ること。大人の皆さんが出来ること。地域の皆さんで出来ること。色んな角度から物事を見ると、より安全で安心な生活が送れるようになるのではないだろうか。

今、私が出来ることが自分が感じた危険場所や、交通ルールを大切な妹にしつかりと教えていく事だ。

来年の四月、私は中学一年生。妹は小学校一年生。交通安全ルールに自信満々の二人で楽しく登校できるようになりますように。

優秀作

文部科学大臣賞

埼玉県宮代町立須賀小学校

一年

山本<sup>やまもと</sup>

幸奈<sup>ゆきな</sup>

きりんさんになる

わたしは、ようちえんのとき、いつも、おかあさんと、おとうとと、あるいてかよっていました。そのとき、おかあさんに、こうつうるうるをたくさんおしえてもらいました。

一ねんせいになって、あさ、がっこうにいくとき、しゅうごうばしよまで、ひとりであるいていくようになりました。さいしよは、とてもどきどきしていました。どきどきしていたことをおとうさんにいうと、

「それは、とってもいいこと。たいせつなことだよ。そのきもちは、おとなになってもずっとたいせつにもつていてね。」

と、いわれました。わたしは、まだ、ひとりであるく、ゆうきがないと、いわれるとおもっていたので、ほめられて、びっくりしました。

おかあさんは、とうこうするとき、まいあさ、かならず「いつてらっしゃい。ちゃんときりんさんになってね。」と、いいます。どうしてきりんさんになるかという、どうろががつながっているこうさてんでは、すこしてまえで、いちどとまって、くびを、きりんさんみたいに、ながくして、のぞいて、くるまがとまってくれるか、じてんしゃや、あるきのひとと、ぶつからないかどうかのあんぜんを、かくにんするからです。わたしは、「きりんさんになる」が、とてもわかりやすくて、きにいつています。こうさてんに、ちかいと、まがつてくるくるまに、ぶつかつてしまうことがあるので、ちよつとてまえでとまることが、たいせつなことです。

げこうはんで、いつしよにかえるおともだちは、いつも、さいしよは一れつで、あるいているけれど、だんだんおしゃべりがふえて、みまもりをしてくれるおとなのひとがいるばしよをすぎると、きゅうに、はしりだすのでわたしは、いつも

「あぶないよ、しんじやうよ。」

と、ちゆういするかかりです。そんなおともだちにも、わたしのうちのあいことば「きりんさんになる」を、おしえてあげようとおもいました。

佳作

警察庁交通局長賞

鹿児島県学校法人池田学園池田小学校

一年 堀川 粋

スピードをまもって

「パパ、スピードおとして！」

わたしのいえは、かごしましなからとおく、やまをこえたところにあります。いえにかえるときには、ほとんどしんごうもあります。そのため、ついさかみちになるとスピードがでてしまいます。

しょうがくせいになるまえ、ようちえんでこうつうあんぜんきようしつがありました。おうだんほどのわたりかたや、かんたんなひょうしきについてならいました。あかいまるのなかにすうじがかいてあるひょうしきが、くるまのせいげんそくです。わたしは、くるまのスピードがはやいなどおもったときには、ひょうしきをさがし

ます。そして、みつけたひょうしきのすうじと、くるまのスピードメーターをみくらべます。

「パパ、くるまはやいよーこは50キロだよ。」

とわたしがいうと、おとうさんはわらいながらスピードをゆっくりにしてくれます。そして、

「すいちゃんはきびしいなあ。スピードはまもらないどね。」

とえがおでいつてくれます。そのあとやまみちをはしるときには、ひょうしきのせいげんそくと、スピードメーターをみくらべています。

「すいちゃんがみていてくれるから、あんぜんにはしれるね。」

といつてもらうと、わたしはうれしくなります。

なつやすみは、いえのうらにあるこうえんであそぶこともおおいです。こうえんにはいるまえにはおうだんほどうがあります。おうだんほどうをわたろうと、とまつてまつているのですが、スピードがはやいくるまは、あまりとまつてくれません。わたしはとおりすぎるのをまつています。ゆっくりはしつてくれるくるまは、とまつてどうぞとえがおでおしえてくれます。わたしはゆっく

りとスピードをまもつてはしるくるまがだいすきです。おとうさんも、

「せいげんそくとをまもつたり、まわりがよくみえていることがたいせつだね。」  
とおしえてくれました。

これからもくるまにのるときには、スピードメーターのみまもりをしていきたいです。そして、わたしもまわりをみて、えがおをおくれるひとになりたいです。

## 茨城県下妻市立大宝小学校

一年 山中 颯真

### ぼくがげんきにとうこうできるりゆう

ぼくは、しょうがくせいになって、まいあさ、つうがくはんのみんなどがっこうまであるいていきます。じぶんであるくようになって、いえのまえのどうろは、スピードをだすくるまがおおいのきがつきました。パパもママもぼくがいきおいよくでようとすると、「あぶないー」

「きをつけて!!」とちゅういしてくれます。そんなとき  
はぼくもあぶないからきをつけてようとおもいます。

がつこうまでのつうがくろ、たくさんのひとにであ  
います。しゅうごうばしよでいつもおそうじをしているお  
じいちゃん。つぎは、りようしつのおばあちゃん。

「おはよう。きょうもあいさつえらいね」

「きをつけていくんだよ!」

あるいてるとちゅうは、はんちようさんがぼくたち  
のあるくスピードにあわせてくれたり、くるまにきづい  
ていないと「あぶないよ!」とこえをかけてくれます。  
がつこうのちかくまでくると、はたどうばんのかたがた  
がおうだんほどうにたつて、ぼくたちがわたるのをみま  
もってくれます。そして、がつこうまえではせんせいが  
まっついてくれます。

ぼくががつこうにぶじにたどりつくまでのやく一キロ  
のみちのり。ぼくはたくさんのひとにみまもられている  
んだなあとおもいました。ぼくがえがおでげんきにかよ  
えるのも、みなさんのおかげです。いつもありがとうございます。  
ざいます。

これからありがとうございますのきもちをわすれずに、じゅう

ぶんにあんぜんにきをつけていきたいとおもいます。ひ  
きつづき、みまもりをよろしくおねがいします。ぼくも  
げんきなあいさつでおかえししていきます。

## 茨城県下妻市立下妻小学校

二年 菊地 優莉

## ヘルメットは、たからもの

かぞくでりようこうに行つていたときのことだった。赤  
しんごうでとまったしゅんかん

「ドーン」

と、とても大きな音がした。わたしたちかぞくもみんな  
で

「キヤー」

と、さけんだ。まわりを見ると、きずだらけのバイクと、  
ガラスがわれたタクシーが見えた。その近くには、よこ  
たわった男の人のすがたが見えた。わたしのおとうさん  
は、いそいでたおれている男の人のもとへ行つた。わた



しは、車でまっているあいだに

「バイクのうんでんしゅさんは、だいじょうぶかな？」  
と、なんどもおかあさんに聞いた。

しばらくして、きゆうきゆう車がきて、おとうさんが  
もどってきた。おとうさんは、

「だいじょうぶだ。よびかけたらうなずいてくれた。  
ヘルメットのおかげでたすかった。」

と、言った。わたしは、バイクのうんでんしゅさんがぶ  
じだったことがうれしくて、おとうさんのことばを聞き  
たとたん、なみだが出てきた。わたしは、

「ヘルメットつてすごくだいじなものなんだね。」

と、言いながらなみだがとまらなかつた。

わたしは、二年生なのでまだじてん車で、どうろは、  
はしれないけれどにわか公園でじてん車にのることがあ  
る。このじこを近くで見て、じてん車にのる前には、か  
ならずヘルメットをかぶろうと、かぞくでやくそくをし  
た。

人のいのちをまもってくれるヘルメット。わたしのい  
のちをまもってくれるヘルメット。そんなヘルメットは、  
わたしの大切なたからものだ。

## 茨城県下妻市立下妻小学校

二年 倉持 陽くらもち ひなた

### 大せつな やくそく

「車はきゆうに止まれないんだよ。歩く人も、車をう  
んでんする人も、こうつうルールをまもろうね。」

ぼくは、お父さんにこう言われています。

ぼくが、いえのそとで、サッカーをしてあそんでいた  
時に、ボールがどうろにころがつていつてしまったこと  
がありました。ぼくが、あわててボールをとりに行こう  
としたときに、お父さんが、

「あぶないー止まってー！」

と、大きなこえで言いました。ぼくは、とてもびつくり  
しました。

それから、ぼくは、かぞくと、どうろの歩き方やこう  
つうルールについて、話をしました。そして、やくそく  
を二つしました。

一つ目は、「ピタッと止まって右、左」です。ぼくは、  
そとであそぶときはもちろん、まがりかどでは、車がき

わたしのじてん車

ていないか、止まってたしかめます。おうだんはどうでは、しんごうが青になっても、かならず右、左を見てからわたります。車のはしつてくるかもしれないからです。二つ目は、「よそ見をしない」です。ぼくは、歩いている時に、友だちや、犬や虫を見つけると、気になって、よこや、うしろを、きよろきよろ見てしまいます。よそ見をして歩いていると、きけんなことに気がつくのがおそくなつてしまいます。まわりに、きけんなものがないか、車はきていないか、気にしながら歩きたいです。

このやくそくは、ぼくだけではなく、かぞくみんなできめた、たいせつなやくそくです。お父さんやお母さんが車をうんでんするときにも、おねえちゃんやおにいちゃんかじてん車にのるときにも、みんなでももうとやくそくしています。

ぼくは、歩く人も、じてん車にのる人も、車をうんでんする人も、一人一人がこうつうルールをまもっていけば、いやな思いや、かなしい気もちになる人がすくなくなると思います。ぼくは、かぞくみんなでやくそくしたことをまもって、元気に、あんげんに生かすついでいきます。

わたしは一年生のとき、少し大きいじてん車をかってもらいました。色はむらさきです。かわいい色できれいだったので、じぶんでえらんでかってもらったおきにいます。

ようちえんのときは、おかあさんのじてん車のうしろにのつていましたが、大きくなつてのれなくなりました。だから、新しいじてん車に、じぶんでのつて、おかあさんといっしょにはしるになりました。

じぶんでじてん車にのると、あるいているときや、おかあさんのうしろにのつているときよりも、交通安全を心がけないといけなことがたくさんあることに気がつきました。

じてん車にのるとき、気をつけようと思ったことが三つあります。

一つ目は、スピードを出しすぎないことです。スピー

ドを出しすぎて、きゅうに止まれなくて車や人にぶつかったら大へんだからです。

二つ目は、まがり角やこうさ点でブレーキをかけ、右をよかくくにんすることです。ブレーキをかけて、ちゃんとかくにんしないと、車をうんでんしてる人にめいわくになったり、じ分もじこをおこしたりするかもしれないからです。

三つ目は、じてん車でどうろをはしっているときは、あるいている人をゆうせんすることです。あるいている人に気をつけないと、ぶつかったりしてけがをさせたりするかもしれません。

じぶんでのると、たくさん気をつけないといけないことがあつてたいへんだと思います。でも、交通ルールをまもつて、じこやけがに気をつけて、お気にいりのじてん車でたくさんおでかけしたいです。

## 鹿児島県学校法人池田学園池田小学校

三年 小田<sup>おだ</sup> 明依<sup>めい</sup>

### 交通安全のおじさんが教えてくれたこと

「おはようございます。今日も一日がんばってくださいね。」

私が学校に行くとき中の横だん歩道には、毎朝交通安全のおじさんが立っています。中学二年生のお姉ちゃんが小学校一年生の時から子どもたちの安全を見守ってくれているそうです。おじさんは、雨の日はレインコートを着て、夏の暑い日も、台風が近づいている時も、雪の日もいつもはたを持って立っています。そして、車の人はたをふつて、私たちが安全に横だん歩道をわたれるように守ってくれます。大雨の時に、空がくらくてこわかった時にも、おじさんが立っていて、

「おはようございます。雨がほしいからけがのないように気をつけて行ってね。」

と話しかけてくれて、こわさがなくなりました。おじさんが安全を見守ってくれるおかげで、私たちは安心して

学校に行けます。

休みの日、お母さんと車で出かけた時、信号がない横  
だん歩道に、ようち園生くらいの男の子とお母さんが  
立っていました。男の子は、右手を高く上げていました。  
私のお母さんは少しはなれた所で車を止めて、

「お先にどうぞ。」

と言って手で合図をしました。男の子のお母さんが頭を  
下げて、私のお母さんも頭を下げて、二人ともにっこり  
あいさつをしていました。

「ほこうしゃゆうせん。男の子が手を上げていたから、  
すぐに車を止めることが出来たね。手を上げてくれてよ  
かった。」

とお母さんが言いました。それから交通安全について話  
し合って、車の人に気づいてもらえるように横だん歩道  
をわたる時には、手を上げてまつことや手を上げてわた  
ることが大切だとさいかくにんしました。

交通安全のおじさんが、私たちの安全を守ってくれる  
ことに感謝して、私に出来ることは安全に気をつけて、  
横だん歩道では車の人に気づいてもらえるように、手を  
上げてわたることを守っていききたいです。そしてありが

とうの感謝のおじぎもしようと思います。

## 群馬県渋川市立橋北小学校

三年 坂井 俊介

### 大切な交通ルール

ぼくは交通安全について家族にインタビュしてみました。  
そうしたら、こんなことができました。

おじいさんは、横だん歩道は左右をちゃんとかくにん  
することだそうです。

おばあさんは、スピードをださないようにせいげんそ  
くどをまもること。

お母さんは、車を運んでいる時は、歩行しゃをか  
ならずかくにんすることを心がけているそうです。

お父さんは、車を運でんする時は、そくどをださず、  
車間きよりをたもつこと。ながら運でんは、ぜったいに  
ないこと。月曜日の朝と金曜日の夕方はスピードを出す  
人がたくさんいるので、前後かくにんに気をつけている

## 茨城県下妻市立下妻小学校

三年 なかじま 中島 すい 翠彩

### 妹とおつかい

わたしは、妹と二人で、家のちかくの店によくおつかいに行きます。妹は、まだ三才なので、交通あんぜんのことをあまりよくわかっていません。いっしょに歩くときに、わたしが気をつけていることがあります。

まず、歩道を歩くときには、車が通っている方をわたしが歩いて、妹をまもるようにしています。

前や後ろから、自てん車が来たときには、妹をはじっこによせて、いっしょに止まって、自てん車が通りすぎしてから歩きはじめます。

とちゆうに、たて物がじゃまで、車がきているかよく見えない所があります。しん号もありません。そこをわたるときは、妹を少し手前でまたせて、わたしが一人です。車が来ていないかよくかくにんしてから、妹と手をつないでわたります。

車がたくさん通る道の横だん歩道をわたるときには、

こと。小学生の登校の時は、いつでも止まれるスピードで通りぬけることだそうです。

そして、ぼくが気をつけていることは、横だん歩道をわたる時は、大きく手をのびしてあげることです。

弟にも聞きたかったけれど、弟はまだしゃべることができないので聞けませんでした。来年になったら、弟がたくさんしゃべるようになって、インタビューができたらいなと思います。

今回ぼくは、家族にインタビューをしてみても、いろいろなことを考えているんだなあと思いました。

交通安全は、人がけがをしなくてすむようにルールをまもることが大切だと思います。

もしぼくが、学校に行く途中に事にあったら、ぼくは死んでしまうかもしれません。そうなると、ぼくは悲しいし家族も悲しむと思います。だれも悲しい思いをしないようにルールをまもることが大事だし、ルールはまもるためにあるものです。みんな一人一人が交通安全を心がければ、悲しい思いをすることがなくなると思いません。

## 東京都墨田区立立花吾嬬の森小学校

四年 おおしま 大島 ささゆ 咲優

### ヘルメットで守る大事な命

妹が道ろにとびださないように手をつないでしん号が青になるのをまちます。しん号が青になっても、まがつてくる車がいるかもしれないので、車がこないかきちんと見てからわたるようになっていきます。これはいつもお母さんからよくちゅういするように言われていることです。まがつてきた車のうんてん手さんが、「どうぞ。」と合図をしてくれた時は、べこりとおじぎをして手をあげてわたります。そうすると、妹もわたしのまねをしてべこりとおじぎをします。

お店についてからも、ちゅう車場は、車がたくさん出入りしているので、妹と手をつないで車に気をつけながらお店に入ります。

わたしが、お母さんのうんてんする車にのっていると、じこにあっている車を見かけることがあります。その車じこの相手が、もし自分や妹だったら、きつと大けがをしたり、しんでしまうかもしれない。そうなたらいやなので、これからも気をつけておつかいに行こうと思えます。

私は小さいころからお母さんの自転車に乗る時も、必ずヘルメットをかぶっていました。『頭が一番大切』と言われていたので、一人で自転車に乗れるようになってからもかならずヘルメットをかぶっています。

自転車教室や交通少年団でも自転車の乗り方や交通ルール、ヘルメットの大切さを教えてもらいました。

ヘルメットをかぶっている時とかぶっていない時の事でケガやなくなってしまう人の人数がどれだけ違うのかが気になり調べてみました。すると、死亡つが2倍、3倍とちがうことがわかりました。大切な人を事故でなくしてしまうのはとても悲しい事なので、ヘルメットで守れる人をふやしていきたいと思いました。

交通安全週間で交通少年団として交通安全のいろいろな活動をするときには、そんな気持ちを含めて、

「自転車や車に気をつけてください。」「自転車に乗る

時はヘルメットをかぶってください。」「交通ルールを守ってください。」と町の人達に笑顔で元気よく伝えていきます。一生けん命に伝えて、

「ありがとう気をつけるね。」

と言ってもらえた時はとてもうれしい気持ちになりました。

私の学校の校長先生は

「先生もヘルメットを買いました。みなさんも自転車に乗る時はしっかりとヘルメットをかぶってください。」と全校朝会でヘルメットを見せてくれました。

今はけい察官以外の大人はあまりヘルメットをかぶっていませんが、大人もかぶる人がふえてほしいと思います。

交通少年団のご笛たいの練習でけい察署に行った時に、ぼう子に見えるおしゃれなヘルメットがかざってありました。

「ママもこれならヘルメットっぽく見えなくていいね。」

と私が言うと

「これはいいね。」

とお母さんが言ってくれました。

まずは身近な家族や友達、そして交通少年団での様々な活動を通して一人でも多くの人にヘルメットの大切さを伝えていき、守れる命をふやしていきたいです。

## 山口県山口大学教育学部附属光小学校

四年 仲なか庵あんじ志

### ヘルメットをかぶろう

ぼくは、母と自転車ですーパーへ行くとき、必ずヘルメットをかぶる。母はヘルメットをかぶらないで乗っている。これは、本当はいけないこと。中学生の姉は、通学や部活に行くとき、必ずヘルメットをかぶっている。これは、良いこと。ぼくのおばあちゃんは、ヘルメットをかぶらないで乗るのは、わるいことをしているようにいやだとよく言う。ぼくは、おばあちゃんと言うことは正しいと思う。

今年の四月一日から道路交通法の改正によって、ヘル

メットの着用が努力ぎむ化された。でも、今までかぶっていたいなかった大人は、ヘルメットをもっていなかったり、かぶるのがめんどろだったりするみたいだ。

ヘルメットは、ぜったいにひつようだと思ふ。なぜなら、事故にあつたり、ころんだり、転落したりしたとき、ヘルメットが頭を守ってくれる。命も助かる。そのことを考えたらみんなヘルメットをかぶるべきだと思ふ。

最近、ヘルメットをかぶっている大人をよく見かけるようになった。ヘルメットの形や色もさまざま。好きなヘルメットを選んで、車に乗ったらシートベルトをするのと同じように、必ずヘルメットをかぶる習かんを身につけてほしい。自分の大切な命のために。ぼくも母に注意したい。

ぼくが自転車で出かけようとすると、おばあちゃんが、「歩いているお年よりに気をつけてね。」とよく言う。

「なんで。」  
とぼくが聞くよ、

「年をとると、歩いていてもふらつくことがよくあるんよ。それで、転んでこっせつしたら大変よ。だから気

をつけて。」

と、答えてくれた。

それからは、お年よりに出会うよ、自転車からおりてそこを通りすぎるまで歩くよにしている。ちよつとしたことだけど、一つの大切な命につながるよことだと思ふ。ぼくも気をつけているので、歩くお年よにも注意してほしい。そして、元氣だけがなく生活してほしい。

## 大阪府大阪市立東粉浜小学校

五年 いま幾多 た 信乃 しの

### 小さな油断、大きな悲しみ

私の母は車の運転ができない。

友達が「家族全員でドライブに行ったんだ。」と話しているよ、いいなあ、楽しそうだなあ、とうらやましく思ふ。ある日、気持ちが爆発し、

「なんで、みんなのお母さんは車を運転できるのに、私のお母さんは車を運転できないの!?!」



と母に言ってしまった。すると母は少し悲しそうな顔になった。

「ひいおじいちゃんが交通事故で亡くなったからだよ。」

母が二十才の時、母のおじいちゃん、つまり私のひいおじいちゃんが不慮の事故で亡くなっていったのだ。静岡に住んでいたひいおじいちゃんはその日、ひいおばあちゃんとその友達を乗せてゲートボール場に向かって車を運転していた。目的地まであと少しという時曲がり角から突如大きな車が迫って来た。ひいおじいちゃんの車はよけきれず大破。ひいおばあちゃんだけが生き残った。それ以来、ひいおばあちゃんは何かを楽しむことができなくなつたのだ。ひいおばあちゃんだけでなく、母も心に深い傷を負い、それは未だ完全にはいえていない。

この話を聞いた私は、おどろいて言葉が出なかつた。母にこんな過去があつたなんて。交通事故によつてたくさんの人が悲しむ様子を目の当たりにした母はその後、車の免許を取ろうとしなかつた。私は

「ひどいことを言つてごめんなさい。そんな理由があるなんて思つてもいなくて。」

とあやまり、このような悲しい事故をなくすためにはどうすればよいか考えた。車を運転する人に限らずすべての人が気をつけないといけない。

私はよく自転車に乗つて図書館に行く。そのルートには曲がり角も信号もたくさんある。信号では左右のかくにんをしっかりと見て、曲がり角ではスピードを落とすとして慎重に曲がる。このような小さなことを守っていくのが大切なのだと心にちかつた。ほんの小さな油断でも、とても大きな悲しみを生むのだから。

## 茨城県八千代町立中結城小学校

五年 仲内 陸

## 仲内家の交通ルール

ぼくの家の交通ルールは「きよろきよろすること」です。授業中にこれをしてしまうと、もちろん先生にしかられるのですが、この「きよろきよろ」が交通事故を防いでくれたのです。

ぼくは通学班で登下校していて、一ヶ所だけ大きな道路を横断します。もちろん、信号のある横断歩道をわたるのですが、青信号になった横断歩道に車がつつこんできたことがあるのです。朝はまぶしかったり、暑かったり、寒かったり、下を向いて歩きたくありません。でも、ぼくは小さなころから車好きで、登校中もきよろきよと走っている車を見えています。この時は

「あれ？あの車止まるかな？」  
と不安になり

「○○くんあぶない！」

とさげびました。一番前を歩いていた班長さんは、つつこんできた車の手前で立ち止まり、ぶつからずにすみましました。事故にならなくて良かったとほっとしたけれど、ぼくの心ぞうはドキドキしていました。

登下校中にあぶないことがあつた時や、交通事故のニュースを見た時、ぼくは家族と話します。そして、どうすれば事故が起きなかつたか、自分だつたらどうしていただろうと考えます。

ある時、お母さんのパート先に軽自動車がつっこむ事故がありました。原因は運転していた人のブレーキとア

クセルのふみまちがいでした。お店のガラスは大きくわかれて、商品のならんでいたたなには、ガラスの破へんが飛び散つて商品は捨てることになったそうです。

「けが人が出なくて良かった。ほかのお客さんがまきこまれたらと思うとぞつとした。」

とお母さんは言いました。

ぼくは、テレビで見えるような事故が身近で起きていることにおどろきました。自分が気をつけていても、とつぜん事故にあつてしまうこともあるんだとおそろしくなりました。

交通ルールのお話をする度に、お父さんとお母さんに言われることがあります。

「外に出ている時はきよろきよろしていいよ。自分の身は自分で守ること。」

ほとんどの人は交通ルールを守っているけれど、残念なことに、信号を守らない、よそ見をする、お酒を飲んで運転する、ほかにも交通ルールを守らない人がゼロになることはないと思います。だからこそ、ぼくはこれからも「きよろきよすること」を続けて、自分の身を守りたいです。

## 福井県福井市東郷小学校

五年

原田

一輝

### 自転車に乗る前に思い出す教訓

二〇二三年三月八日、僕は自転車で事故をおこしてしまつた。忘れられないあの日、友達の家へ遊びに行つた帰り道、帰る時間を過ぎてしまい、ぼくはとても急いでいた。自転車をとぼして走つていた時、目の前の歩道を横切ろうとしているおばあさんが見えた。ぼくは頭の中で「行ける」と思い、おばあさんの横を通りすぎようとした。その時「いたたた」と声が聞こえた。自転車のハンドルがおばあさんの体にあたつてしまつたのだ。僕は頭の中が真っ白になつた。手がふるえた。座りこむおばあさんに近づいて行き、「大丈夫ですか？ごめんなさい。立てますか？」と聞いたのを覚えている。おばあさんは、足に人工的に作つた骨が入っていて、なかなか立つことが出来なかつた。ぼくは携帯電話を借りて、おばあさんの家族とぼくのお父さんに電話をかけた。その後しばらくして、警察の人が来た。ぼくはたいほされるの

かと思ひ、ドキドキが止まらなかつた。でも警察官は「何があつたの？」と優しく聞いてくれた。とてもホツとした。「しっかり話してくれてありがとう」と言ってくれた。その後、おばあさんは、救急車に乗つて病院へ行つてしまつた。お父さんが遠くから歩いてきてくれる姿を見たとき、ぼくは涙が出そうになつた。緊張して立っていた僕の足から力がフニャフニャとぬけてゆくようだった。

「ごめんなさい。」

「逃げずに残つてえらかつたよ。」

まだ周りの人がたくさんいたので、泣くのをがまんした。

今回ぼくは実際に事故をおこして、二度とこんな経験はしたくないと思つた。あの時なぜ「行ける」と軽く考えてしまつたのだろう。ちゃんと止まっていたら、おばあさんもケガをしなくてすんだし、家族に怒られることも、ぼくがその後しばらく自転車禁止になることもなかつたはずだ。

今回のことで自転車の恐さもよく分かつた。事故の後、自転車事故で死んでしまう人がいることも知つた。それくらい危ない乗り物だ。だから今後自転車に乗る時は、

すっかり周りの状況を見て、交差点では止まり、人の近くを通る時はゆっくり走ることなどのルールを家族で話し合った。

おばあさんは今もリハビリをしているらしい。うまく歩けるようになることを祈る。

ぼくは今日も自転車に乗る。あの日を忘れない。これからもそれはぼくの教訓として心に残り続けるだろう。

## 茨城県下妻市立下妻小学校

六年 飯原 愛理

「サイクリング」が教えてくれたこと

今年の春、栃木県真岡市の井頭公園に家族で遊びに行きました。到着後、園内散歩用に自転車を貸し出していることを知った母が、

「せっかくだから、みんなでサイクリングを楽しみながら桜の花を見よう！」

と言い出したため、何年も自転車に乗っていない父母や祖母、たまには乗る私の五人全員が自転車を借りることになりました。

ヘルメットをすっかりかぶり、コースをスタートしました。美しい緑の木々や、咲きほこる桜の花を見ながらのサイクリングはとても楽しくて、家族みんなで

「気持ちいいね」

「最高だね」

などと言い合いながら、のんびりと自転車をこぎました。父、母、祖父、祖母、私の順で一列になって走りました。私が一番後ろを走りにしたのは、八十代の祖父、七十代の祖母が、私や父母といっしょに走ってつかれたりしないか後ろから見守ろうと思ったからです。

みんなを見ながら走っていると、気になることがあります。父母は問題ありませんが祖母は道路に転がる石や張り出した木の根など、障害物への反応がとてもおそいのです。また、後ろから追い抜こうとする人たちにもなかなか気付かず、私が

「危ないよ、後ろから自転車来るよ」

と伝えても、急には方向を変えられず、もう少しでぶつ

かりそうになったりするなど、ヒヤリとする場面が何度かありました。いずれも相手がよけてくれたため助かりましたが、私はこのままではいけないと思いました。

「みんな、いったん止まってー」

私の呼びかけに、みんなは自転車を止めてふり返りました。私は、さまざまなことに対する祖父父母の反応がおそいために「ヒヤリ・ハット」が数回あったことなどを伝えました。

「このままでは危ないと思う。私が一番前になって、じいちゃん、お父さん、ばあちゃん、お母さんの順番で走ろう。何かあったら、私とお母さんが大声で伝えよう。」と提案すると、父母が「それは良いね」とほめてくれました。私の提案を生かしたその後のサイクリングはとても安全で、ヒヤリとする場面は一度もないままみんな笑顔でゴールすることができました。祖父母に「ありがとう」と言ってもらえてうれしかったです。

祖父母のようにお年寄りの反応がおそくなるのは、耳のおとろえなどもあり仕方がないことだと思います。徒歩や自転車、自動車などお年寄りが移動する時には、周りの人たちがしっかり気を配ることが大切なのだとい

ことを、今回のサイクリングは教えてくれました。人にやさしくする気持ちから、みんなが安全・安心に暮らせる社会を実現できるといいなと思います。

## 秋田県大仙市立内小友小学校

六年 佐藤<sup>さとう</sup> ひより

### 交通ルールは幸せのリレー

「行つてらっしゃい。今日も気をつけて。」

私の朝は、やさしくてあたたかな「行つてらっしゃい」のリレーが始まります。六年生の私は、九人の登校班の班長です。玄関での家族からの「行つてらっしゃい」をスタートに、みんなの家に寄るたび、お家の方からも「行つてらっしゃい」「気をつけてね」の声をかけられる朝を送っています。

登校途中に、歩行者からも運転手からも少し見えづらい交差点があります。そこは登校班の小学生も、また仕事に向かう車も通る道なので危険な場所です。でも、こ

こにはどんな天気の日でも交通安全の旗を持ち、私たちを見守ってくれる地域の方がいるのです。私たちのこども、そして止まってくれた運転手にもやさしい笑顔を送ってくれます。おかげでこの交差点を通る私たちは、毎日安全に登校できています。今では高校生になった兄も

「ぼくたちもずっと見守ってもらったよ。朝は忙しいはずなのに、本当にありがたいね。」

と言っていました。心から、見守り続けてくれてありがたいの思いがあふれてきます。

今年に登校班に一年生が三人増えた分、通いなれた道でも、四月の私はドキドキ緊張していました。でも、あの交差点でいつもの地域の方が、

「ひよりちゃん、いよいよ六年生になったね。人数は増えたけど大丈夫、がんばってね。」

と声をかけてくれました。大きな返事をしながら、おかげで班長としての思いを新たにすることができました。ふと後ろをふり返ると、黄色いぼうしと黄色いランドセルカバーをつけて、かわいい一年生がいつしようけんめい歩いています。よし、今年も安全に登校するぞ、と願

いを強く持つことができた私です。

ゴールである小学校が近づくと、そこには横断歩道があります。この場所にはいつも、笑顔の校長先生とボランティアの方が待っていてくれます。校長先生たちとあいさつを交わすと、今日も登校班のみんなと安全に到着できた、とほっとした気持ちになります。

「ルールはめんどうくさいことや、きゆうくつなことではないんだよ。ルールを守ることはルールに守られること。交通安全は悲しむ人を減らし、うれしい未来を創るからね。」

これは、交通課に長く勤務していた元警察官の祖父がよく話すことです。祖父と話しながら、私自身、交通ルールを守ることや実践することを当たり前に思える六年生になっていることに気づき、自分をほこらしく感じました。これはきつと私の周りの大人が、交通安全のルールを当たり前に守る姿を見せてくれる人たちだったからだと思います。私の小学校六年間は、多くの大人たちの交通安全を願うやさしさ、あたたかさのラリーによって作られてきたのだと思うと、うれしくてたまらない気持ちでいっぱいです。

「行ってらっしゃい」「気をつけて」のバトンを受け取って、これからも私たちの一日を安全に作っていききたいと思えます。

## 神奈川県横浜市立茅ヶ崎東小学校

六年 田中 紳慈

### 事故の痛みを乗りこえて

ドンッ！ 右肩に固いものが突然、ぶつかり、痛みが走りました。六年生になったばかりの四月、道路を渡っていた下校途中、僕はワゴン車と接触する事故にあいました。現場は、自宅のすぐ近く、普段は車がほとんど通らない、静かな住宅街の中、横断歩道のない、通学路に指定されている場所でした。

ただ、そこは電柱と生い茂る街路樹のせいで見通しが悪く、僕はいつものように、歩道から車道に降り車が来ないか確認していたところ、ワゴン車に接触してしまっただけです。

幸い、肩が少し痛むだけだったので、僕は急いで家に帰り、両親に「目の前の道路で車にぶつかった」ことを話しました。急いで、両親と現場に戻った僕に、運転手さんは「そちらが飛び出してきた」と言いました。

その言葉を聞き、僕は、自分が不注意だったのかもしれないと自分を責めはじめました。

数分後、サイレンを鳴らした。パトカーが到着しました。僕は「いよいよ、大ごとになってしまった。もつと気をつけていれば」とさらに暗い気持ちになり、胸が痛くなりました。

しかし、警察官の方は「大変だったね。けがは大丈夫かな」と優しく話しかけてくれました。そして、手ぎわよく運転手の人からも話を聞き、両親と僕に「今は痛みがなくても、必ず医師の診察を受けてくださいね」と言いながら、ほほえみかけてくれました。

続いて、かけ付けた校長先生も、お見舞いの言葉をかけてくれただけでなく、現場の街路樹の様子を詳しく確認してくださいました。

その後、運転手さんの勤めている会社からも「前方不注意でした」との丁寧な謝罪があり、自分を責め続けて

いた僕の胸の痛みは少しずつ和らいでいきました。

そして、夏休み前。学校から依頼を受けた区の土木事務所の人が現場の街路樹を大きく刈り込み、見通しがとてもよくなりました。

事故にあったばかりの頃は、肩の痛みだけでなく、自分を責める気持ちから来る心の痛みに悩まされ、眠れない日もありました。

しかし、警察官の方、学校の先生方、お医者さん、両親が、優しい言葉をかけてくれ、また、街路樹が刈り込まれたのを見て、自分を責める気持ちは、だんだんお世話になった方々への感謝へと変わっていききました。

僕は今回、交通事故の被害者となり、被害者の痛みには、けがから来る体の痛みだけでなく、被害にあった自分を責めてしまう、心の痛みもあることを知りました。ただ、その痛みでさえ、色々な人の真心に触れることで、やわらげられることも、同時に知りました。

事故のことは、二度と思い出したくないけれど、今回お世話になった方々への感謝は、一生忘れません。

そして、お世話になった方々への恩返しとして、自分の体験を同級生や下級生に伝え、事故にあわないよう注意を

呼び掛けるとともに、不幸にも事故にあってしまったときには、周囲の人に助けを求めることの大切さを、多くの友だちに分かってもらえるよう努めたいと思います。